

「いかに筏流し」からみた文化情報学 —アナログとデジタルの融合—

大久保 恒 治

【要旨】 1994年の文化情報学部創設からカリキュラム改革によって、その理念が少しずつ時代とともに変化してきた。本稿では、メディア情報学部へと全面的に衣替えするに当たり提案を行う。一方、「筏流し」などの地域での取り組みは、道具や技術の伝承がされなければ存亡の危機に立ち向かう。「まちづくり」には、インターネット環境を含むデジタル環境での再生が欠かせない。筏流しも例外ではなく、アナログからデジタルへと資源の利用により実施してきている。アナログな現実世界への還元作用により筏流しの再現が可能となる。それはまさしく、「アナログとデジタルの融合」そのものになる。

【キーワード】 文化情報学、アナログ、デジタル、博物館、デジタルアーカイブ、地域、まちづくり、筏流し、名栗川、西川林業

1. はじめに

1994年の文化情報学部の創設からカリキュラム改革によって、その理念が少しずつ時代とともに変化してきている。2012年度から、文化情報学部からメディア情報学部へと全面的に衣替えするに当たり、その理念の再構築を試みる。結論として、文化情報学は「アナログとデジタルの融合」の学問といえることができる。

一方、筏流しは江戸中期より大正期まで全国の林業地域から消費都市まで木材の搬送手段として発展してきたが、近年の鉄道・陸送によって交替し、現在は本来の目的に沿ったものは存在¹⁾しない。従って、そのハードウェアもソフトウェアも、技術の伝承がされなければ存亡の危機に立ち向かう²⁾。元々はアナログの存在であった筏流しを、筆者は、地域の中で「まちづくり」に欠かせないと判断して、小規模グループを起ちあげ現在に至っている。「まちづくり」には、インターネット環境を含むデジタル環境での再生が欠かせない。筏流しも例外ではなく、アナログ情報とともにそれからデジタルへとアーカイブしながら実施に役立っている。ただ、実現化に

は、デジタル情報をアナログ現実世界への適用による還元作用で筏流しの再生が可能となる。それはまさしく、「アナログとデジタルの融合」そのものになる。

2. 博物館法の原点と文化情報学部の創設

2007年7月に第3回駿河台大学大学院現代情報文化研究科シンポジウム「文化情報資源の蓄積・活用と法」が開催された。そこで日露野好章氏が講演「新しい時代の博物館制度のあり方—博物館法改定をめぐる諸問題」³⁾で、「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」の中間報告(2007年3月)では博物館の定義の再考が提示され、学芸員と来館者のコミュニケーションの重要性を説いたことに言及した。

博物館の定義は、博物館法第2条第1項には、「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管(育成を含む)し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする。」とある。我々は日本の博物館等が必ずしも「一般公衆の利用に供し」ていな

い現実を見てきている。実際、地域の「まちづくり」では、博物館等の資料を利用できない場面が多くある。また、博物館員の現場⁴⁾では、人材と資金が不足しており、飯能市郷土館のように「市民学芸員」制度を設けているところも多い。さらに「市民」の範囲を広くとらえていくことは、本稿第4章の観点からも必要である⁵⁾。実際の博物館に関する調査は、2007年情報知識学会人文・社会科学系部会研究会での報告⁶⁾がある。

駿河台大学では、1994年の文化情報学部の創設からカリキュラム改革によって、その理念が少しずつ時代とともに変化してきている。2012年度から、文化情報学部からメディア情報学部へと全面的に衣替えするに当たり、その理念の議論⁷⁾は多くある。第一世代は、2学科4コース（文化情報学科：映像情報コース、観光情報コースおよび知識情報学科：知識コミュニケーションコース、レコード・アーカイヴズコース）を”複製”-”原型”軸と”文字情報”-”非文字情報”からなる4領域への投影と見なした理念からはじまり、2001年度の改訂時に、ストック対フローの概念を取り入れ、現在に至っている。いわゆるデジタルアーカイブはその一領域を占めている。デジタルアーカイブは、そのほかの領域、映像音響、観光、図書館情報などの学問領域と関連してその存在が生きてくる。本稿第4章で議論するように、それらの学問領域が活用されて初めて「文化情報学」といえる。

近年、デジタル化さらにはデジタルアーカイブ化の動きが活発になってきている。デジタルを幻のゴールとみなしている傾向は否めない。アナログ状態の保管・蓄積やデジタル化情報の保管・蓄積でとどめていたのでは、継続的な「再現」ができない。つまり、再現にはいかにしてデジタルのアナログへの適用を実現しうるかにかかっている。我々は、改めて、「文化情報学」とは何かを問うことが、続く「メディア情報学」への発展につながると確信している。

さらに「情報メディアエイト」の定義そのものも、近年のソーシャルメディアの隆盛を見ると、さらに拡張した概念が必要となろう。

3. 筏流しの過去と現在

一方、筏流しは江戸中期⁸⁾より大正期まで全国の林業地域から消費都市まで木材の搬送手段として発展してきたが、近年の鉄道・陸送によって交替し、現在は本来の目的に沿ったものは存在しない。従って、そのハードウェア⁹⁾もソフトウェア¹⁰⁾も、技術の伝承がされなければ存亡の危機に立ち向かう。西川林業地域における山仕事の技の存続は、この地域の最後の筏師を親に持つ中里吉平氏¹¹⁾にかかっている。一方、多摩川へ通じる多摩地域でも、往時の技を伝えられる人が少なくなってきている¹¹⁾。

西川林業地域¹²⁾では、江戸幕府開府以降、度重なる江戸の大火の復興のために、江戸時代初期から木材を搬送していたといわれている。明治時代になっても筏流しは、明治20年から40年にかけて、日清・日露戦争による木材需要が急増した時期だったといわれている。

大正4年(1915)に飯能-池袋間に武蔵野鉄道¹³⁾が開通すると鉄道による木材輸送が始まり、また、道路が整備され、山方からはトラックで木材運搬が行われるようになった。これにともない筏流しは減少し、大正末期から昭和初め頃を境にして完全に姿を消したといわれている。

それ以降の20世紀では、本来の目的とは異なる「筏流し」および筏製作は以下の通りである。昭和60年以降の筏組と筏流しは中里吉平による。なお、資金面では公募により助成¹⁴⁾を受けた行事もあった。



図1 1987年名栗川での筏流し (NHK取材)

- 昭和54年(1979年)8月名栗川[NHK(最後の筏師)]鹿戸富吉さん(最後の筏師)制作
- 昭和60年(1985年)10月名栗川[自由の森学園]
- 昭和62年(1987年)9月名栗川[NHK「関東ネットワーク」]
- 平成元年(1989年)10月名栗川[筏流し後飯能市郷土館に展示]
- 平成5年(1993年)2月東京ドーム「世界のらん展」
- 平成6年(1994年)10月名栗湖「名栗湖国際野外交渉展」



図3 2003年の筏流しの様子¹⁹⁾

筆者は「筏流し」が「まちづくり」の起爆剤になると考え、「原市場の古へを探らふ会¹⁵⁾」を作り、後年「西川筏再現プロジェクト¹⁶⁾」へと発展させた。それらのプロジェクトの主な活動を抜粋する。なお以下の筏組みと筏流しは中里吉平の指導による。詳細は[付録]を参照されたし。この活動も他の活動に違えず、資金面で、公募助成を受けている。一方、飯能市では、「森林文化都市」宣言¹⁷⁾を行い、民間のエコツーリズム¹⁸⁾企画では大賞も受賞している。

9月6日：土入れ神事と筏組み

9月7日：筏流し

(a) 名栗川(飯能市原市場地区)

(b) 入間川(飯能市加治地区)

当時の筏流しの実際をできるだけ再現した。ただ、「山川(やまっかわ)」では三枚の筏を連ねて流していた姿は、上流のダム設備のより川の深さが十分内ないためなどで、(a)ではなく(b)でようやく実現できた。

(1) 昔ながらの筏流し「筏流しで元気イッパイ」(2003年9月)



図2 2003年「筏流し」ポスター

(2) 入間川沿いの4市1村の博物館等(入間市博物館、川越市立博物館、飯能市郷土館、狭山市立博物館、旧名栗村教育委員会)では、埼玉県西部地域博物館入間川展合同企画協議会²⁰⁾を発足させた。飯能市(飯能市郷土館)では飯能河原で「筏流し」を行った。「原市場の古へを探らふ会」は、前年度の筏流しの実施の情報提供をした。(2005年9月)

(3) 名栗川²¹⁾手作りいかだコンテスト(飯能市原市場地区の名栗川にて)

「筏流し」の実施が資金と人材の面から継続的に困難なと、市民・住民が川や「いかだ」への親しみを持てる試みを企画した。

- 第2回名栗川手作りいかだコンテスト(2004年9月)
- 第3回名栗川手作りいかだコンテスト(2005年8月)
- 第4回名栗川手作りいかだコンテスト(2006年8月)
- 第5回名栗川手作りいかだコンテスト(2007年8月19日)

(4) 講演および展示

- 駿輝祭ゼミナール展示「筏今昔浪漫譚」(2005年10月) 駿河台大学文化情報学部・大久保ゼミナール
- 駿河台大学公開講座「彩・ふるさと喜楽学」
「西川筏再現から森林文化へ」(講師は筆者) 2007年6月²²⁾ 講演および西川筏再現プロジェクト製作・筏組みデモ

(5) TVチャンピオン「イカダ川下り王選手権」参加
「筏流し」の再現とそのPRのため、TV出演を積極的に行った。これはその一環である。

- 幻のTVチャンピオン「イカダ川下り王選手権」²³⁾
2006年7月～8月(テレビ東京)
- TVチャンピオン2「イカダ川下り王選手権」出場(テレビ東京)撮影:2007年6月(埼玉県・長瀨)、放送:同年8月

(6) 全日本イカダサミット参加

全国の「イカダ」仲間が集う大会で、同時にその地での川下りも実施。

- 第10回全日本イカダサミット参加
2007年7月福岡県飯塚市、第28回遠賀川川下り大会 2007年7月遠賀川 23km
- 第11回全日本イカダサミット参加
- 2008年滋賀県守山市、野洲川にて

元来はアナログの存在であった筏流しを、筆者は、地域の中で「まちづくり」に十分生かせると判断して、小規模グループを起ちあげ現在に至っている。筏流しには、ハードウェアとして、筏作り・筏組みの道具、ソフトウェアとして、山川の神事がからみ、筏を作る(伐る)道具の使い方、筏の材料と寸法、筏を縛る綱、筏の組み方、筏の操り方などの技術が欠かせない。そのため、技術伝承と併せてデジタル環境での再生が欠かせない。しかしながら、デジタル情報そのものを現実のアナログ世界で調和的に適用することは今後の文化情報学には欠かせない視点である。アナログ情報と、それから変換されるデジタル情報の双方を利用してこそ、現実世界へ

の還元作用により筏流しの再生が可能となるのである。それはまさしく、「アナログとデジタルの融合」そのものになる。

4. デジタルアーカイブの今後

2010年3月「地域住民参加型デジタルアーカイブの推進に関するフォーラム」が総務省・関東総合通信局主催で開催された²⁴⁾。

これは、近年のICTの進歩と、地域の歴史・文化等を伝承する意識の高まりの中で、図書館等の公的機関のみならず、NPO法人等が運営する地域住民参加型のデジタルアーカイブが拡大しつつあり、それは、地域共有の資料保管庫としての役割のほか、観光・まちづくり等の地域振興において重要な役割を担っている。

しかし、地域住民参加型デジタルアーカイブは、地域内外の認知度が低いため、十分に利活用されていないほか、技術・人材・ノウハウ・資金等の面において諸問題を抱えていることが多く、継続的な運営が困難なケースも見受けられ、このままでは蓄積されたコンテンツが死蔵又は散逸してしまうことが危惧されている。

フォーラムでは、調査検討会の成果報告のほか、基調講演を行うとともに、「持続可能な地域住民参加型デジタルアーカイブの構築について」をテーマに、パネルディスカッションを行った。各地の事例では群馬や横浜²⁵⁾のなどの実施主体が報告をした。

そのほか自治体では品川区²⁶⁾がよく知られている。「3.11」以降では、民間企業²⁷⁾の試みもある。駿河台大学では2011年度特別研究助成により、プロジェクト「地域における文化情報資源のデジタルアーカイブ化に関する基礎研究」が開始され、筆者も参画している。

研究分担者はメディア情報学部の専任教員4名と現代文化学部専任教員1名から構成され、主な役割分担は表1の通りである。文化情報学としてのデジタルアーカイブを目指した目的²⁸⁾は以下の通りである。

氏名	所属学部	専門	分担する役割
杜 正文	メディア情報学部	情報システムの構築と理論	データベースシステム設計・開発
福永 昭	現代文化学部	観光開発論	地域連携・まちづくり
寺島 秀美	メディア情報学部	情報科学、情報システム	サーバー・クライアントの構築
野村 正弘	メディア情報学部	博物館の資料・展示・教育	デジタルアーカイブ統括
大久保 恒治	メディア情報学部	計算機科学・経済統計学	アーカイブシステム設計

表1 特別研究担当者の専門と分担

- (1) 消滅しつつある地域文化情報資源のアーカイブ化
- (2) 博物館法の当初目的としてのアーカイブの公開と活用
- (3) 文化情報学の基本理念としての「アナログとデジタルの融合」の具現化
- (4) 地域文化情報資源のデジタルアーカイブ公開による地域活性化と大学の地域貢献

この研究成果は改めて別稿で報告する。

筏流しのデジタルアーカイブ化もこのプロジェクトの進行に伴い筏流し再現へと向かうことが期待される。

5. おわりに

文化情報学部の創設からカリキュラム改革によって、その理念が少しずつ時代とともに変化してきた。2012年度から、文化情報学部からメディア情報学部へと全面的に衣替えするに当たり、その理念の再構築を試み、文化情報学は「アナログとデジタルの融合」の学問であることをみてきた。

一方、筏流しは江戸中期より大正期まで全国の林業地域から消費都市まで木材の搬送手段として発展してきた。しかし、そのハードウェアもソフトウェアも、技術の伝承がされなければ存亡の危機に立ち向かう。アナログの存在であった筏流しを、地域活性化のコンテンツとして十分生かし、小規模グループを起ちあげ現在に至っている。「まちづくり」には、インターネット環境を含むデジタル環境での再生が

欠かせない。筏流しも例外ではない。デジタル情報のアーカイブ化は当然としても、そのデジタル情報をアナログ世界へ十分に活用することこそが地域活動継続への鍵となる。それはまさしく、「アナログとデジタルの融合」そのものになる。

謝辞

本稿は下記特別研究より支援を受けた。ここに記して感謝したい。

駿河台大学平成23年度特別研究助成「地域における文化情報資源のデジタルアーカイブ化に関する基礎研究」(共同研究者:杜正文、福永昭、寺島秀美、野村正弘、大久保恒治)

注

- 1) 和歌山県北山村の「北山川観光筏下り」のみが観光事業として成功している。<http://site.murablo.jp/sightseeing/ikada/>
筏復元では、京都の保津川などが活動をしている。
- 2) 参考文献 [10] では、「波ざる」の復元において、技術伝承の重要性を論じている
- 3) 博物館法改訂に関する議論は参考文献 [8] 参照。博物館法は <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S26/S26HO285.html>
- 4) 筆者も、筏に関する資料、たとえば、報告書やフィルムの貸与を申し出たが快諾の回答を得

- ていない。
- 5) [7] では、専門学芸員ではない市民活用の利点を議論している。
 - 6) 研究会報告は、参考文献 [3] [11] を参照
 - 7) 文化情報学に関する議論は、参考文献 [5] [6] [16] [17] を参照。
 - 8) 現在見つかっている筏関係の文書は正徳3年(1713)のものが最古である。これ以降、筏に関する文書は数多く残されているが、ほとんどが筏の通行をめぐる下流の住民と対立した争論に関する記録である。
 - 9) 西川林業の道具は、参考文献 [4] 参照。
 - 10) 筏流しなど、全国の木材に関する民俗の観点からは、参考文献 [15] を参照
 - 11) 筏流しおよび、道具・習わしについては、参考文献 [9] の「名栗川「筏物語」」pp.15-56の項とNPO 法人木楽会会報「中里吉平さんに聞く「山仕事昔がたり」」連載を参照。また、東京の林業と林業家および往事の技と再現の取り組みについては、参考文献 [13] [14] を参照。
 - 12) 「西川」とは地名ではない。江戸時代以降、この地方の村々では、山から切り出した木材を、筏に組み、江戸(東京)に盛んに搬送していた。消費地である江戸から見ると「西の川筋から流されてくる木材」のため、『西川材』と呼ばれるようになったと言われている。西川林業とは、埼玉県南西部の荒川支流の入間川、高麗川及び越辺川流域で行なわれている林業のことをさす。
<http://www.city.hanno.saitama.jp/kyodo/nishikawaringyou.html> を参照。
 - 13) 武蔵野鉄道は現在の西武鉄道池袋線となっている。
 - 14) 助成金を含む支援制度の議論は、参考文献 [1] および [2] PART3 を参照。実際の応募は、中央ろうきん助成プログラムである。
<http://www.rokin-ikiiki.com/program.html>
 - 15) 「原市場の古へを探らふ会」(www.geocities.jp/haraitibajp/inisihe/) は、原市場地域の過
去(古へ)を通して、地域の今と未来を語るきっかけとし、その結果、地域住民(新旧住民、高齢者と若者・子どもたち)のコミュニケーションの場となることにより、地域の活性化を目指すことを目的としている。
 - 16) 「西川筏再現プロジェクト」(<http://www9.plala.or.jp/hara18can/nishikawaikada/index.html>) は西川林業地域で生業としていた筏師の技術の伝承と筏流しの再現による地域活性化を目指すことを目的とする。
 - 17) 「飯能の「森林文化」とは?—「西川林業の道具」から見た飯能の森林文化—」<http://www.city.hanno.saitama.jp/kyodo/sinrinbunka.html> および飯能市「森林文化都市宣言」<http://www.city.hanno.saitama.jp/kikaku/toshisengen/index.html> を参照。
 - 18) 飯能市は「日本エコツーリズム協会」(<http://www.ecotourism.gr.jp/>) で、エコツーリズム大賞を受賞している。このNPO法人の「エコツアー総覧」(<http://ecotourism.jp/>) に筆者のプロジェクトも登録されている。
 - 19) 「広報はんのう」平成15年10月1日号表紙写真から転載。
<http://www.city.hanno.saitama.jp/kouhou/download/pdf/h15/h151001.pdf>
 - 20) 4市1村合同企画展の内容は参考文献 [12] を参照。
 - 21) 公式には入間川だが、地元では、旧名栗村から飯能市の飯能河原までを名栗川と呼んでいる。一方、それを「山川(やまっかわ)」と呼び、飯能河原からは入間川となり、入間川と秩父からの荒川との合流付近までを「下川(しもっかわ)」と呼び、その下流以降の荒川を「大川」と呼んでいた。
 - 22) 幻のTVチャンピオン参加による地獄の体験模様はブログ「TVチャンピオン イカダ川下り王選手権」(<http://blogs.yahoo.co.jp/>

haraitibajp) を参照。幻という意味は、撮影自体は実施されたが、トラブルにより、放映が中止されたためである。

また、「TV チャンピオン」(<http://www.tv-tokyo.co.jp/tvchamp/back/070802.html>) も参照。

- 23) 大久保恒治「西川筏再現から森林文化へ」2007年度駿河台大学公開講座 前期Ⅱ～ふるさとの歴史・文化～ 彩・ふるさと喜楽学 2007.6.16
- 24) 総務省関東総合通信局：「プレスリリース」(平成21年度) <http://www.soumu.go.jp/soutsu/kanto/if/press/p21/p2110/p211020r.html> を参照。
- 25) 「横浜開港150周年 みんなでつくる 横濱写真アルバム」(<http://www.yokohama-album.jp/>) を参照。
- 26) 「-品川区-しながわ WEB 写真館-」
<http://www.city.shinagawa.tokyo.jp/photo/>
および「-品川区-しながわ WEB 映像館-」
<http://www.shina-tv.jp/> を参照。
- 27) 未来へのキオク(<http://www.miraikioku.com/>)
や、東日本大震災写真保存プロジェクト(<http://archive.shinsai.yahoo.co.jp/>) を参照。
- 28) 目的は、(1) 地域住民の家屋改修時に廃棄されることが多い、古い写真・フィルム、道具などの文化情報資源をデジタル化することにより、地域文化の保存・活用に役立てること。(2) 収集・保存がほとんどの日本の博物館の事情ではあるが、それらの公開と活用に向けた取り組みにより更なる展開が見込まれるようにすること。(3) デジタル化が趨勢と見られるが、アナログ文化情報資源のデジタル化により、史料保存が容易になり、さらにアナログ社会への還元により活用が期待されること。(4) 研究経過・成果発表の場と同時に、活用の場としてのデータベース公開を、地域に根ざした大学の地域貢献になることである。

参考文献

- [1] 枝川明敬, 「地域文化活動の効果と今後の文化活動の在り方」, 『駿河台大学文化情報学部紀要』, 第15巻第1号, pp.1-10, 2008.6.
- [2] 池上惇編, 『文化経済学の可能性』, 芸文協出版部, 226p, 1991.4.
- [3] 北岡タマ子, 「人文系博物館の目録情報の現状—都道府県博物館への調査結果から—」, 情報知識学会 人文・社会科学系部会研究会, 4p, 2007.4.
- [4] 飯能市郷土館, 『飯能の西川材関係用具』, 飯能市郷土館収蔵資料目録3, 飯能市郷土館, 152p, 2007.3.
- [5] 原田三朗, 「文化情報学とメディアエイター」, 『駿河台大学文化情報学研究所所報』, 文化情報学研究所 2004年度定例研究会報告, 第5号, pp.95-102, 2006.3.
- [6] 波多野宏之, 「文化情報学再構築のために」, 『駿河台大学文化情報学研究所所報』, 文化情報学研究所 2004年度定例研究会報告, 第5号, pp.103-121, 2006.3.
- [7] 樋口雄介, 「新しい博物館資料の研究手法」 駿河台大学文化情報学部未発表卒業論文要旨, 2p, 2006.1.
- [8] 日露野好章, 「新しい時代の博物館制度のあり方—博物館法改定をめぐる諸問題」, 『駿河台大学文化情報学研究所所報』, 第3回駿河台大学現代情報文化研究科シンポジウム「文化情報学の蓄積・活用と法」, 第5号, pp.61-66, 2008.10.
- [9] 西村一男, 『ふるさと漫録—奥武蔵原市場の今昔—郷土史と習俗のエッセイ集』, はんのう文庫, 飯能郷土史研究会, 143p, 1999.9.
- [10] 野村雅弘・大久保博樹, 「「波ざる」の復刻と職人技を取り巻く現状」, 『駿河台大学文化情報学部紀要』, 第17巻第2号, pp.63-70, 2010.12.
- [11] 奥本素子, 「館種別デジタル画像に関する意識

- 差について」, 情報知識学会 人文・社会科学系部会研究会, 4p, 2007.4.
- [12] 埼玉県西部地域博物館入間川展合同企画協議会, 『入間川再発見! ~身近な川の自然・歴史・文化をさぐって~』, 136p, 2004.9.
(「第3章入間川の筏流し」 pp.65-94. の抜粋は、飯能市郷土館「入間川の筏流し」
<http://www.city.hanno.saitama.jp/kyodo/irumagawaikada.html>)
- [13] 東京の林業家と語る会編, 『聞き書き 山の親父のひとりごとーリングリ・木馬・水車製材…』, みどりのブックレット No.5, 森と木と人のつながりを考える (株) 日本林業調査会, 92p, 2003.6.
- [14] 東京の林業家と語る会編, 『聞き書き山の親父のひとりごと2ー鉄砲堰・架線・造林…』, みどりのブックレット No.6, 森と木と人のつながりを考える (株) 日本林業調査会, 103p, 2005.9.
- [15] 山村基毅, 『森の仕事と木遣り唄』, 晶文社, 347p, 2001.4.
- [16] 安澤秀一・原田三朗編著, 『文化情報学』北樹出版, 239p, 2002.6.
- [17] 安澤秀一, 「『文化情報学』構築への提言再説」, 『駿河台大学文化情報学部紀要』, 第9巻第2号, pp.3-5, 2002.12.

[付録]

- 2002年8月「原市場の古へを探らふ会」発足。
- 2003年9月昔ながらの筏流し
9月6日: 土入れ神事と筏組み (図4)



図4 2003年土入れ神事

9月7日: 筏流し (図5)

- (a) 名栗川 (飯能市原市場地区)
- (b) 入間川 (飯能市加治地区)



図5 2003筏流し

- 2004年3月「復活! 原市場館」開催 (図6)
大正期から昭和19年まで、山間地域の旧原市場村にあった700人収容規模の劇場の再現として、当時劇場にあった道具・資料や古いポスターの展示と昭和期の映画上映。



図6 「復活！原市場館」展示と映画上映

- 2004年9月名栗川手作りいかだコンテスト
飯能市原市場地区の名栗川（図7）



図7 名栗川手作り筏コンテスト風景

- 2004年9月飯能市郷土館の筏流し
飯能市の飯能河原にて。
- 2005年7月原市場中学校「ふれあい講演会」
筏流しの技術を持つ唯一の人との共同講演会

- 2005年8月第3回名栗川手作りいかだコンテスト
- 2005年10月駿輝祭ゼミナール展示「筏今昔浪漫譚」駿河台大学文化情報学部・大久保ゼミナール（図8）



図8 2005年駿輝祭展示

- 2006年7月～8月幻のTVチャンピオン「イカダ川下り王選手権」出場（テレビ東京）（図9）
- 2006年8月第4回名栗川手作りいかだコンテスト
- 2007年6月駿河台大学公開講座「彩・ふるさと喜楽学」
「西川筏再現から森林文化へ」講演および西川筏再現プロジェクト製作・筏組みデモ
- 2007年6月TVチャンピオン2「イカダ川下り王選手権」
出場（テレビ東京）（図10）
撮影：（埼玉県・長瀬）、放送：2007年8月
- 2007年7月第10回全日本イカダサミット参加
福岡県飯塚市、第28回遠賀川川下り大会 23km

イカダ川下り王選手権

ラウンドMC: ジョーダンズ 山崎まさや 2006.8.31OA

《競技内容書》

清水苑 (長瀬) 住所: 埼玉県秩父郡皆野町 TEL:

イカダ RULE

選手は現場で事前に用意した材料を用い、手作りのイカダを作成する
制作時間は6時間 決勝ラウンドまで1つのイカダを補修して使用しなければならない
イカダのどこかにオリジナルの旗を立てる

1 ROUND 長瀬障害物ラウンド

4チーム→3チーム 7月18日(火)

場所: 埼玉県長瀬 親鼻橋下流~長瀬駅付近 約3km

- 6:00 各リーダーのみ試走
 - 7:00 前フリ、作りスタート
(5秒番宣)
 - 13:00 作り終了、選手は昼食
物盛り
CCD セットアップ ※15:00まで
 - 13:30 コース説明(ルール)用機影 (フォロ-選手4名は放水ゾーンに移動)
 - 15:00 スタート地点へ移動 (フォロ-選手4名は放水ゾーンに移動)
 - 15:30 1ラウンド スタート
- スタート地点 住所: 埼玉県秩父郡皆野町皆野 (親鼻橋下流右岸)

RULE

1チーム4名 3名が乗船し、1名はフォロ-役として動く
4チームが一斉にスタートし、途中の障害物を全てクリアしゴールしなければならない

イカダゾーン:イカダでの上陸テクニックを競う

選手のうちリーダー1名が上陸し、長瀬名物カキ米を完食しなければならない

放水ゾーン:放水の中を強い漕り、度胸と操船技術を競う

フォロ-役1名は予め設置された放水器で、他のチームの進路を妨害する

流石橋ゾーン:流れの中でいかにかに止まっていられるかを競う

予め設置されたチームカラーの風船を矢で割らなければならない

上位3チームが2ラウンド進出。最下位のチームはリタイア
※誰か1名でも落ちた場合すぐに放出し、必ず3名と旗が一組にゴールしなければならない

- 18:00 撮影終了、撤収⇒水上へ移動
- 21:00 水上餐、夕食
※イカダカスタム、作戦会議風景等撮影



図10 2006年TVチャンピオン筏組みの場面

- 2007年8月第5回名栗川手作りいかだコンテスト
- ト
- 2008年7月第11回全日本イカダサミット参加
滋賀県守山市、野洲川冒険大会

図9 2006年TVチャンピオン出場内容

Cultural Information Resources Study from IKADA-NAGASHI Point of View – Harmonizing Activity between Analog and Digital Information Resources

By OHKUBO Tsuneharu

[Abstract] The principles of the Faculty of Cultural Information Resources have changed little by little through its curriculum reform since the establishment in 1994. This paper allows an opportunity to make a proposal towards transforming fully into a Faculty of Media Information Resources.

On the other hand, community building efforts such as IKADA-NAGASHI are confronted with a life-or-death situation, and need the passing down from generation to generation of the tools and techniques of reconstruction in order to survive. Town planning has to be reconstructed within the digital environment including the Internet. IKADA-NAGASHI is a typical example of how to make use of all available analog and digital information resources. By the reduction to analog in the real world, the practice of IKADA-NAGASHI is once again able to be revived.

Without a doubt, harmonization between analog and digital information resources will eventually develop.

[Key words] Cultural Information Resources Study, analog, digital, Museum, Digital Archive, Community, Town Planning, Downstream by Ikada, Naguri-gawa river, Nishikawa-Forestry District